

攻めの経営で、金型製作からプレス加工、 メッキ、塗装、組立までの一貫生産体制を確立。 そして今、新たな地平に向かってさらなる挑戦を!

柳沼プレス工業株式会社

若き女性常務が率いるプレス加工の名門企業

東北は福島県二本松市。ここに、創業60年以上続くプレス加工の名門企業がある。実質的に経営を取り仕切っているのは、30歳代の女性常務だという。同社を訪れたのは、平成21年7月中旬のことである。

キャリアウーマン風の女性を想像していたのだが、迎えてくれたのは清楚でたおやかな感じの女性だった。話し方も穏やかで、男性の職場というイメージが浸透しているプレスメーカーのトップとは思えない。

柳沼裕子氏。2代目社長である父親、柳沼克己氏の片腕として経営全般を任されている。入社は、平成8年。自ら志願しての入社だった。2人姉妹の長女として生まれたことで、高校に進学する頃から跡を継ぐことを考えていた。そのため、大学で国際経営学を学んだ。卒業後、数年間他社で修行し、戻ってきた。総務、営業、製造とすべての業務を経験して、18年から常務を務めている。

得意技の「絞り」を活かし、各種モーターケースをメインに生産

広報も担当している裕子氏によれば、同社は一種の「連

邦運営」を念頭に、柳沼プレス工業を中核としたグループを形成、金型の設計製作からプレス加工、機械加工、溶接、メッキ、塗装、組立と、モノづくりに関わる殆どすべての工程をカバーする態勢を整えているという。

また、中国広東省東莞にもプレス加工とメッキの工場を持っている。過去には台湾やアメリカに合弁工場を置いていたこともあったそうだ。顧客企業の動向やその時々々の経済情勢、産業構造の変化などに応じて技術力を磨き、組織的にも機敏に対応してきた歴史がうかがえる。

本体の柳沼プレス工業は、トランスファープレスを中心に多種多様なプレス加工を行っている。得意技術は「絞り」で、「これには絶対の自信を持っている」と、裕子氏。現在の主力製品は、自動車用をはじめとする各種のモーターケース、AT・CVT関連部品など。他に、エア機器部品も製作している。

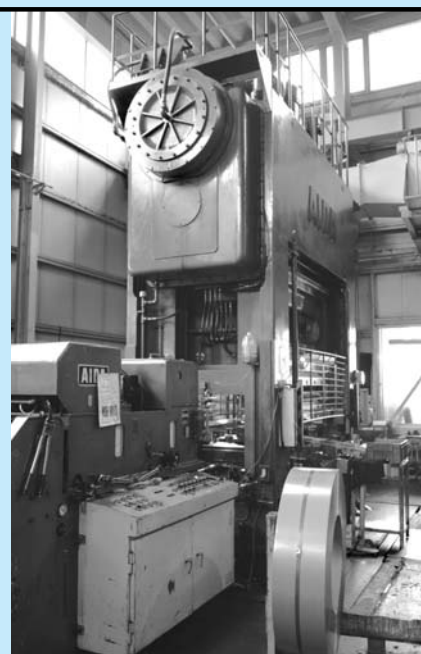
資本金1億9000万円。社員数は60人、グループ全体では約250人。売上高は平成20年3月期で約31億円（グループ全体）、という陣容である。



▲精密成形機 UL-400トン 加工エリア 3500ミリワイド機



▲トランスマックスプレス FT-N50G 500トン



▲トランスマックスプレス 300トン

景気が最悪のときにUL-400トンを導入した理由とは…

同社には、200トンクラスを中心に、プレス機が50台近くある。その大半が、AIDA社製だ。剛性の高さ、寿命の長さ、精度のよさなどがAIDA社の製品を選んだ理由だという。そして、21年の2月に、新たな1台をAIDA社から購入した。ULの400トン(UL4000)だ。

「これまでと同じようなモノづくりをしていたのでは、早晚、やっていけなくなります。切削をプレス加工に置き換えたり、冷間鍛造やファインブランキング工法のプレス化など工法転換もあります。ULは、こういった加工技術にも対応できる、ポテンシャルの高いプレス機です。そう考えて、技術力アップのために導入を決めました。当社独自の特別仕様で、工程数15、最大blank径ちどり加工でφ160ミリ、最大絞り高さ

80ミリを実現しています」(裕子氏)

発注したのは19年の12月。そこからどんどん景気が悪化していったが、同社は納入を急がせた。どん底の時にこそ、次に備える好機と考えたからだ。AIDA社の担当者は、「景気が悪化するなかで納入を急がせられたのは、柳沼プレスさんだけです」

と、証言する。

同社は、このUL-400トンの導入を機に、「中小企業ものづくり基盤技術特定研究開発」(経済産業省)の認定を受け、高張力鋼板をターゲットとした深絞りや異形絞りの研究開発をすすめている。いずれ、強力な武器となることだろう。

足元を固めて、次の発展に備える

学生時代も他社で修行していた時も、常に、「うちの会社だったらこんなときどうするか」と考えて行



▲NC1-200トン×5連 ロボットライン



▲トランスファ装置付 NC2-250トン



柳沼プレス工業株式会社

<http://www.yaginuma.co.jp>

常務取締役

柳沼 裕子氏



▲本社・工場全景

会社のあらまし

所在地 福島県二本松市槻木241番地
 TEL 0243-23-2525 FAX 0243-23-4918
 代表取締役 柳沼 克己
 創業 昭和21年 資本金 19000万円
 社員数 約60名(本体のみ) 売上高 12億円(08年3月期、本体のみ)

動してきたという裕子常務。同社に入社したとき、真っ先に考えたのは、「社内の風通しをよくして、前向きな意見がどんどん出るような会社になりたい」ということだった。その思いはまだ3割程度しか実現していないが、着実によくなっている、と手応えは感じている。

今後の抱負を尋ねると、こう答えた。

「今は、足下を固める時期だと思っています。社内体制、営業、技術…。すべての面で足下を固める。具体的には、現場の改善を徹底的に行って無駄を省く、これまでに培ってきた技術を総点検してシェイプアップを図る、プレス単品の精度をあげる、当社の強みと課題をチェックして強みをさらに活かし、弱いところを補強する——そういったことを考えています。UL-400トンを導入したのも、もちろん、この足下を固めたいという思いが元になっています」

こうした“改革”を進めるには、常識にとらわれない柔軟な発想が欠かせない。裕子氏は、社員にそうした意味での頭の切り替えも求めている。

将来的には、環境にや

さしく人にもやさしい部品づくりを通じて、地域経済に貢献し、社員みんなが幸せを享受できるような会社に育てていきたいという裕子氏。ご自身のモットーは、「やるしかない!!」。その精神で、今後も会社を引っ張っていききたいという。

「先にも申し上げましたが、当社は、プレスからメッキ、塗装、組立まで、一貫したモノづくりができるのが最大の強みです。どんなご要望にもお応えいたしますので、何でもご用命ください。記事にはそう書いていただけると、嬉しいです」

と、いたずらっぽく笑ってインタビューをしめくった。



▲精密成形機 UL-400トン 加工エリア 3500ミリワイド機



▲製品例



▲製品例



▲製品例



▲CAD/CAM設計室



◀ワイヤーカット放電加工機



▲研磨室



▲マシニングセンタ



▲CNC旋盤



▲スポット溶接と検査ライン